

「不思議なパプリカ (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka



パプリカの中に入っていた小さなパプリカは、空洞に浮いているのではなく、中心の芯(種子のできる部分)にくっついていて、その芯には種子を作るために、水や養分の通り道がある。この小さな実も、その芯の部分から栄養をもらって、実の空洞部で育ったものらしい。



実はこの現象は、それほど珍しい事ではないようだ。インターネットで「パプリカの中にパプリカ」と検索をかけると、ゴロゴロと画像やブログがヒットした。どれも同じように、「赤や黄色のパプリカを切ったら、緑色の小さなパプリカが出てきた!」といったものだった。驚いて、しかも面白くてネットにアップする人

が多いのだろう。しかし、生物学的にどんな意味や仕組みなのかは、どこにも書いてなかった。



自然界…特に生き物の「形」や「ふるまい」更には「存在そのもの」にも、ほぼ例外なく意味がある。どんなに変な形、常識外のふるまいをしていても、それにはその生き物が生きる為の、何らかの意味があるのだ。それを読み取ることが大切なことである。この「子持ちパプリカ」も一定の確率で発現しているようなので、何か意味があるのだろう。

「ほぼ例外がない」と書いたが、数少ない例外がキノコだと思う。「一部のキノコに毒がある理由」「一部のキノコが発光する理由」はわかっていない。菌類は他者を分解して、さまざまな物質を作って子実体(キノコ)形づく。その物質の中に、「偶然ヒトにとって毒として作用する物質」「偶然発光する物質」が含まれていた、と解釈するしかない。



パプリカの中にあっただのはパプリカだろうから、美味かどうかは別にして、食べられるはずだ。サラダに入れてみると、味はほぼ「無し」。しかし、独特の香りはまさしくパプリカであった。これだけうまく栽培して、ちゃんと熟したものを「種なしミニパプリカ」として販売したら、大ヒットするにちがいない。